



酒津樋門

Sakazubimon

木嶋光宏

KIJIMA Mitsuhiro

八千代エンジニアリング株式会社
経営企画本部/経営企画部/広報課



倉敷市酒津

酒津樋門周辺は、JR倉敷駅から北西に車で10数分ながら、岡山県三大河川の一つである高梁川の雄大で清らかな流れと八幡山をはじめとする緑豊かな山並みが一体となった自然環境のもと、酒津公園として整備され、潤いとやすらぎに満ちた空間が形成されている。

この一帯は江戸時代から明治時代の終わりまでの約300年間にわたり干拓が行われ、築堤と高梁川が運ぶ多量の土砂により、現在の倉敷、船穂、玉島などの広大な土地が形成されていった。しかし堤防は貧弱なもので、しかも天井川であったため、たびたび「洪水」が起こり大きな被害が繰り返された。また日照りによる干ばつで「水争い」も絶えなかった。そこで、国への度重なる陳情の結果、1911(明治44)年に内務省の直轄工事として沖野忠雄技監を中心に、水島の河口にいたる全長約24kmにおよぶ新しい堤防を築く高梁川改修工事が着手された。これに伴い、高梁川両岸にあった11の取水樋門を統合して、酒津樋門が整備された。



国内最大級の土木遺産酒津樋門

酒津樋門は1924(大正13)年に完成した施設群であり、この地域では珍しい鉄筋コンクリート構造を有し、花崗岩の装飾が施されている。現存し今も活用されている樋門としては国内最大級であり、2003年度土木学会選奨土木遺産に選出されている。

施設群は、笠井堰(油圧式転倒ゲート)、取水樋門7連(延長51.5m、電動油圧鋼製スライドゲート)、配水池(3.1ha)、南配水樋門15連、北配水樋門6連(延長4.3m、8門電動式スライドゲート)で構成されている。高梁川の流水は笠井堰で堰き止められ、左岸にある取水樋門により配水池に導入される。導入された水はここで一時貯留され、砂れきの沈殿も行われる。そして南配水樋門からは(写真1の右から)倉敷(2門)、備前樋(2門)、南部(5門)、西部(3門)、西岸(3門)の各用水に、北配水樋門からは八ヶ郷用水を經由して、山根川、中川、三番川、浜川の各用水に分水され、倉敷市、早島町、船穂町の耕地約4,000haの用水として供給されている。

水江サイフォン(伏樋)・水江の渡し

南配水樋門から流れでる用水路の一つ西岸用水は、水江サイフォンにより高梁川の底を横断し、対岸へ通じ今も機能している。一方、その伏樋の上では高梁川に唯一残る渡し舟「水江の渡し」が運行している。対岸までの距離は50mほどであるが、手の合図により木造の小舟が人や自転車を運ぶ。対岸は同じ水江の町であり、水江の渡しは川に沈んだ道の替わりとなる生活道路である。幕末から明治にかけて14ヶ所あったとされる渡し舟は、橋や道路の整備で姿を消したが、この水江では日本の原風景として今も残されている。



高梁川東西用水組合

酒津樋門は1916(大正5)年に設立された高梁川東西用水組合のためまい努力によって管理がなされてきた。配水池や用水路周辺には遊歩道が整備され、水辺空間を最大限に活かす配慮が行き届き、樋門を身近に見て感じることができる。夕涼みに15連の南配水樋門の上を乳母車で散歩する母子の姿を見かけた。歴史的土木構造物が周囲の美しい自然と調和し機能しながら、ひとの生活にとけこんでいる光景から、土木の持つ力強さと優しさを感じた。

桜の名所としても知られ、4月には薄いピンク色の花びらが咲き乱れる公園内に、1996(平成8)年、東西用水組合設立80周年を記念して、黄緑色の花をつける「御衣黄」という桜が植樹された。むかし高貴な人の服が黄緑色だったことからその名が付いたと言われる桜だが、ソメイヨシノとは違った趣があり、「さわやかさ」が訪れる人々の目を引き寄せるそうだ。今回の取材で東西用水組合には懇切丁寧に対応いただき大変お世話になった。筆者には、その方々の人柄とこの御衣黄の「さわやかさ」が重なって見えるような気がする。酒津樋門はこれからも組合や地域に守られながら機能し続け、市民の安らぎと憩いの場として親しまれていくことであろう。

〈参考資料〉
高梁川東西用水組合設立80周年記念誌1996年11月 高梁川東西用水組合

- 写真1[前頁上]—南配水樋門15連
- 写真2[前頁右下]—笠井堰と八幡山
- 写真3[左上]—取水樋門7連(高梁川側)
- 写真4[上中央]—取水樋門7連(配水池側)
- 写真5[右上]—北配水樋門6連
- 写真6[左下]—水江サイフォン(伏樋)
- 写真7[下中央]—水江の渡し(正面中央が対岸の発着所)
- 写真8[右下]—配水池と桜(中央奥の建物は当時の面影を今も残す東西用水組合管理棟) <倉敷市野田正人氏撮影>
- 図1[前頁左下]—酒津樋門概要図